

初めて音楽というものを意識したのはいつですか？
若しくは、音楽に出会ったのは何処ですか？

私の場合は、勉強の合間に聴くラジオから流れる素敵な曲たちが、音楽との出会いでした。独特の言い回しの糸居五郎さん（「Go, Go, Go & Goes On!」などの独自の英語交じりのアナウンスで有名。音楽番組『ソウル・フリーク』などのDJ）や小林克也さん（TV番組『ベストヒットUSA』等で有名）など当時のラジオのDJたちは、本当に良い音楽番組を提供してくれたなあと思うんですね。そんな番組たちから、スティービー・ワンダーの『悪夢(邦題)』に始まり、当時の流行りのSOULやDISCOミュージック、そしてロックやブルースに出会いました。



ラジオDJ
糸井五郎

それに加えて、毎週の音楽ランキング番組も音楽の情報収集には欠かせないものでした。そのおかげで、洋楽一辺倒だった私もここでは甲斐バンドやアリスとかの今ふうに言えばJポップなどの邦楽も聞きました。でも、いわゆるロック系の西洋音楽であったのは間違いありません。



当時の聴取スタイルは、シングルレコードを買っては、同じ曲を何度も何度も…、いわゆるスレ切れる程に聴いていました。今の時代は、気に入った曲をダウンロードする時代だから、形は違いますがシングルレコードの時代に戻った感じがしています。けれども、あのレコードジャケットのデザインや、B面の隠れた名曲とかの楽しみは失われてしまったと思います。残念です!!

邦楽でよく聞いた音楽♪ (アリス、甲斐バンド)



♪ 1970年代のSOULミュージックやDISCOミュージックたち ♪



左から、『悪夢』スティービー・ワンダー／『ハッスル』ヴァン・マッコイ
／『愛がすべて』スタイリスティックス／音楽番組『ソウル・トレイン』

『楽器演奏への憧れ、チューブの音』

さて高校生になると、友達の影響もあり、レッド・ツェッペリンやディープ・パープルなどのハードロック、そしてYesやキング・クリムゾン、そしてジェネシスなどのプログレッシブ・ロックにはまりました。



『胸いっぱいのおを』
Led Zeppelin



Led Zeppelin
1st Album



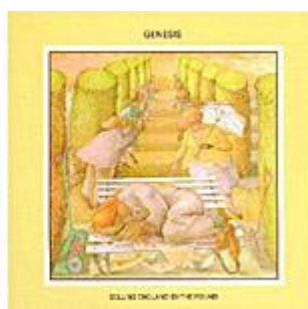
アルバム『In Rock』
Deep Purple



King Crimson



Yes



Genesis

ステレオという仕組みを楽しむかのように、左手から右手へと音が飛び交うジミー・ヘンドリックスやジミー・ペイジ、長いソロを演奏するクリームのエリック・クラプトン、バッハなどのクラシック音楽を思わせるメロディーのリッチーブラック・モア、官能的な演奏のカルロス・サンタナといったギターリストたちに夢中になった訳ですね。

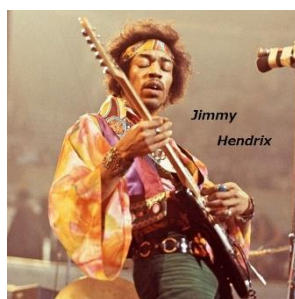


それと中でも特にジェフ・ベックがお気に入り、これは今でも別格のギターリストです！（『ブロー・バイ・ブロー』というインストゥルメンタル・ロックのアルバムはジャズの世界から、高く評価されています）

音源はどれもラジオのエアチェックでした。テープ・デッキを手に入れた事もあり、NHK-FMの『軽音楽を貴方に』などのラジオ番組からのエアチェックをたくさんしました。



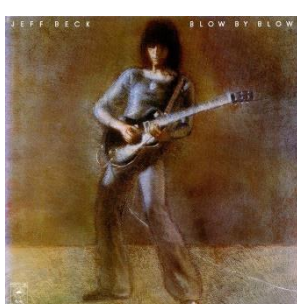
Cream



Jimmy Hendrix



Santana



Rainbow(Richie Blackmore) , Jeff Beck / 『Blow by Blow』 , 『Wired』 , single 盤『監獄ロック』

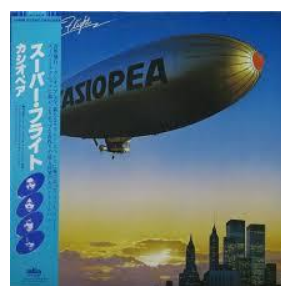
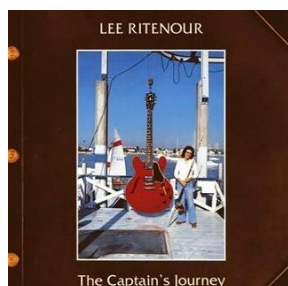
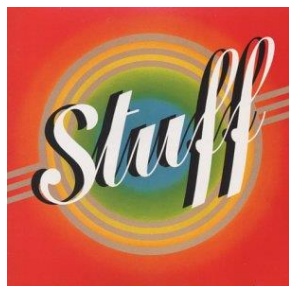
私はそれらの音楽の影響で、エレキ・ギターを始めた訳ですが、そのギターリストたちが使うのは殆んど真空管アンプなんですね。この何とも柔らかで暖かい音が、とても好きで憧れました。

アンプと言っても、エレキ・ギターの音を出す「スピーカー・アンプ」の事なんです、自分が当時使っていたのは40Wのトランジスター・アンプでした。本当は柔らかな音のする真空管アンプが欲しいなと思ってましたが、真空管のアンプは高くて手が出せなかった！これが、オーディオへの趣味の始まりだったかと思います。

『ジャズとの出会い』

さてさて、大学に入ると念願の楽器演奏のために、音楽サークルに入った訳ですが、そこは植木等さんが昔いたジャズ・サークル『軽音サニー・アイランド（通称サニー）』。伝統あ

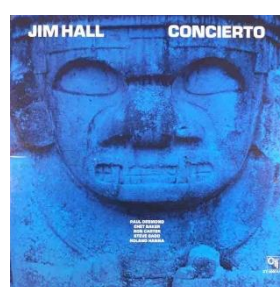
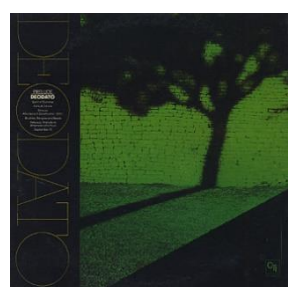
る名前のサークルでワクワクしたのを覚えています。そこではサークルの仲間とバンドを組んで、クロスオーバー（フュージョン）の演奏をやるようになりました。担当は当然エレキ・ギターです。スタッフやリー・リトナーといったクロスオーバー、それと日本のカシオペアのコピーバンドです。それで、色々な音楽をたくさん聴いて演奏の参考にしようと、レコードを集めました。また当時は貸しレコード屋もありましたから、借りては録音して聴くという、音楽三昧の毎日でありました。



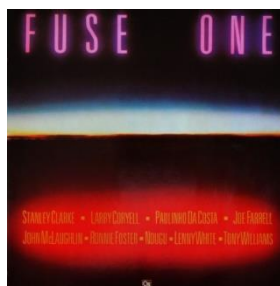
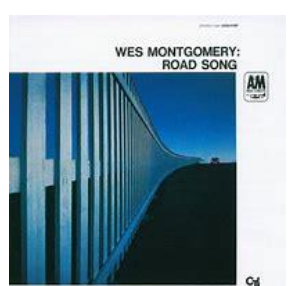
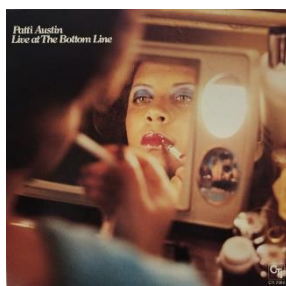
Stuff / 1st , Lee Ritenour / Captains Journey, Casiopea / Super Flight

レコードジャケットにある演奏者の名前から、その演奏者が参加している他のレコードを辿って行ったので、自然とフュージョンからジャズへと進んで行きました。その中でもクリード・テイラーのプロデュースによるジャズレーベルのCTIレコードはフュージョン系のアルバムがたくさんあって、そのクレジットには、ボブ・ジェームスやデビット・マシューズに始まり、ジョージ・ベンソンやフレディ・ハバート、そしてスティーブ・ガット、グローバー・ワシントンJr、ジム・ホール。少し若手なら、ハイラム・ブロックやウィル・リーといったアーティストが載っていました。(挙げれば枚挙に暇がありません!) 私はそれらを辿りながら、新たなアルバムに出会ってましたから、ジャズ系の音楽を好きになるのは必然だったのです。

~CTI Records~



California Concert (George Benson 他) , Deodato, Jim Hall



Patti Austin , Wes Montgomery, Fuse One (Stanley Clarke 他多数)

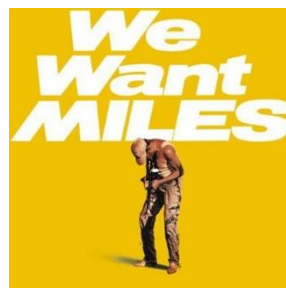
また当時、通っていた大学（文京区白山）の近くに、『映画館』というちょっと変わった名前のジャズ喫茶があって、毎日のように通い詰めていました。ここではジャズの様々な曲を聴く事ができましたし、ジョン・コルトレーンの『マイ・フェイバリット・シングス』に出会ったのもこの店でした。今もとても好きな曲であり、好きな演奏です。



マイルス・デイビスも聞きましたが、音程がはずれたような音のトランペットが好きになれず、その頃はまだマイルス・デイビスの本当の良さはわかりませんでした。1981年、新宿西口での野外ライブ（会場は、今は都庁舎が建っている場所で行われた。）の、御大マイルス・デイビスの復活コンサートには行く気にはなりませんでした。今から思えばとても残念な事だったと思います。



John Coltrane



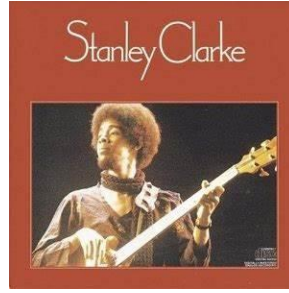
Miles Davis

『My Favorite Things』 / 『We Want Miles』 (Live at Nishi-Shinjuku)

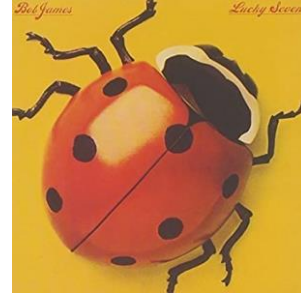
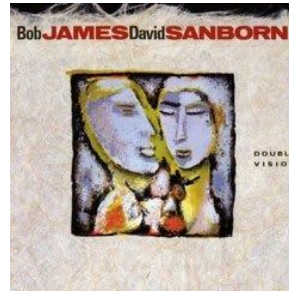
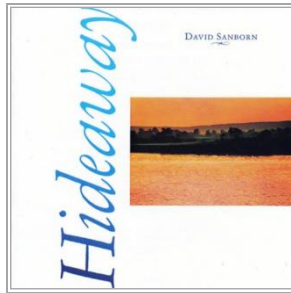
昔、神保町にあったジャズ喫茶『響（ひびき）』も、友達のお父さんがやっていたご縁で良く行きました。JBLの大きなスピーカーの前で、色々な曲をリクエストして聴いていたのを思い出します。



それと、ライブ・コンサートに良く足を運んだのもこの頃です。日野皓正やスタンリー・クラーク、それとデビッド・サンボーンなど、1番前に陣取って演奏を聴く、いや「音を浴びて」いたのを思い出します。特に管楽器は生の音を聞けましたから、レコードとかでは味わえない音を体験できたと思いますね。これは大変良かったと思いますし、今でも音作りの参考になっていると感じます。チック・コリアのリターン・トゥ・フォーエバーのベーシストであったスタンリー・クラークの影響でベースに転向したのも、この頃であることを加えてお伝えしますね。（ちょっと自慢話になりますが、米米 CLUB のホーンセクションにいた川合わかばさん〜トロンボーン、サクソ奏者で、現在はクレイジーケンバンド在籍〜とも一緒にフュージョン・ファンク・バンドをやりました！）



日野皓正, Stanley Clarke



David Sanborn, Bob James

『新たなる音楽との出会いを求めて』

社会人になると少しお金に余裕もできて、ようやく自分のお金で買えるようになったのですが、そのオーディオのアンプがトランジスター式でしたが、やはり満足いきません！真空管のあの柔らかな音が欲しくて、中古の真空管アンプを求めるために秋葉原のラジオ会館に通って、2ヶ月で買い換えとなってしまいました。さすがにオール・チューブのアンプは買えなくて、初段のみ真空管のALPINE/LUXMANのアンプです。それでもようやく、それなりに自分好みの音になりました！スピーカーはTANNOYのTD-100という組み合わせで、低音も良く出るし、中域の音も良い感じです。ちょうどこの頃には少しクラシックも聴くようになっていましたが、ジノ・フランチェスカッティのバイオリンが良い音で鳴ってましたね。



社会人になると忙しくて、音楽を聴く時間は少なくなりましたが、メモリー・オーディオのおかげで、勤めの行き帰りに音楽を楽しむ事ができました。取り込んだ音楽を聞くだけでなく、再びラジオのお世話になるようになりました。

義父から引き継いだLUXMANの真空管アンプ(360)、TANNOYのスターリングといったデラックスなオーディオもあるのですが、専らBOSEのインナーイヤー型ヘッドフォンで聞いてます。



昨今ではライブを見に行くと、ひいきのミュージシャンも歳をとったり、亡くなったりで、残念ながら昔のような演奏はしてくれません。そのため、フレッシュな演奏を生で聴くには新しい音楽家を見つけなければならないと思うようになりました。それを解決する手段といえば、音楽雑誌と、やはりラジオなんですね。最近、ラジオのブロードキャスターとして活躍されているピーター・バラカンさんの『バラカン・ビート』と『ウィークエンド・サンシャイン』という番組をよく聴いています。そこでは私の知らなかった世界中の音楽を紹介してくれるし、また私の好みの音楽をかけてくれるので、これらの番組をととても楽しんでおります。若手のジャズミュージシャンのロバート・グラスパーもバラカンさんの番組で見つけた1人でしたね。ハービー・ハンコックを思わせるような演奏や新しい取り組みのサウンドがとても気に入ってます。

それとバラカンさん主催の『ライブ・マジック』というライブ・コンサート・イベントも見にいきましたがそこでも新たなミュージシャンを何組も見つけています。青山にある『ブルー・ノート』や六本木の『東京ミッドタウン』といったライブレストランにもよく行きましたが、特に思い出されるのは、そこで見たスタンリー・クラークは、若手のミュージシャンを起用して、凄い演奏を聴かせてくれました。まだ日本では名前の知られた演奏家ではありませんが、これからどんな演奏を披露してくれるのか、とても楽しみにしております。

最後に、2019年の春から私は我孫子オーディオファンクラブに入りましたが、ここでもたくさん新しい音楽に出会うことができました。あらたな音楽との出会いができたことをクラブの皆様にはとても感謝しております。フィニアス・ニューボーン Jr、カーメン・マクレエ、マリア・ジョアン・ピレシュ、オーギュスタン・デュメイ等々、素晴らしい演奏家たちです。このような出会いがあった事はこの1年の収穫でしたし、このようなソフトだけでなく、ハードの部分でも見たこと聞いたことのないものに溢れていて、とても新鮮でした。これからも、クラブの発展を楽しみにしていますし、どんなものが出てくるのかも期待しております。

